

ウ 「社会性の学習」と認知の学習の関係

自閉症の教育課程のもう一つの大きな柱に「認知の学習」があります。「認知の学習」は、自閉症の情報処理過程の特性に応じて、指導方法を工夫することによって、言葉や数・数量に関することなどの基礎などを学ぶ学習になります。認知の学習は、ある特別な授業で指導するよりは、あらゆる授業や学習において、情報処理過程の特徴を配慮して指導することでもあります。

小学部の場合、認知の学習の課題を多く取り扱う授業として、国語、算数の時間が考えられますが、この授業は、指導方法の工夫の一つとして、個別指導を行うこともあります。

上述のように、「社会性の学習」も個別指導に重点が置かれ、認知の学習としての個別指導との関連について明確化する必要があります。

【課題例】 3切片のパズルを完成させる課題	
「社会性の学習」では、パズルを組み立てられるのではなく、学習態勢・共同動作・協調性の習得が、学習の目標となる。	認知の学習では、絵を見て、パズルを組み立てることができることが学習の目標となる。
ねらいの例 <ul style="list-style-type: none"> ・教師に褒められて、学習を進める学習態勢を確立する。 ・教師の指示に従って、決められた順番でパズルを完成する。 ・教師と一緒に、順番にパズルを完成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パズルの絵に注目して、パズルを完成する。 ・完成後の絵を見て、何が書いてあるか言える。

(3) 内容

「社会性の学習」は、「対人関係に関する内容」と「ソーシャルスキルに関する内容」の二つの内容を基本とする。

ア 対人関係に関する内容

イ ソーシャルスキルに関する内容

(東京都都立特別支援学校小学部・中学部 教育課程編成基準・資料より)

「社会性の学習」における、「社会性」とは、一般的に言われる社会生活全般に関わるような広い意味で「社会性」を対象としているものではありません。自閉症の教育課程の「社会性の学習」における「社会性」とは、対人相互反応の質的な障害やコミュニケーションや想像力の障害などにより、社会で生活していく上での困難さと関係している内容、例えば、他者の理解や状況の理解に基づく行動や社会のルール、マナーを指しています。

このようなねらいから、「社会性の学習」は、「対人関係に関すること」と「ソーシャルスキルに関すること」の二つの内容を基本とします。

ア 「対人関係に関すること」の指導内容

対人関係に関することの指導は、自閉症の社会性の障害に起因する困難さの中で、人とのやり取りに関することや場面に応じて人とどのように関わったらいかなど、他者や状況に応じた行動を指導内容にします。

このため、指導内容として、大項目として、**(ア) 人への対応の仕方の理解と具体的な行動**、**(イ) 状況への対応の仕方の理解と具体的な行動**を示し、その内容としては、①身近な人の存在の意識と人を介した行動 ②人の名前、顔、表情等の弁別 ③挨拶、強化、禁止、依頼等

の言葉の理解、対応、表現 ④人からの期待の理解 ⑤周りの人に合わせた行動の5項目になります。この分類は、平成19年度の「自閉症の障害特性に応じた教育ガイドライン」を参照ください。

本書では、この内容を、指導項目がより整理しやすいように、①「身近な人の存在を理解」すること、教師の意図を理解したり、簡単なやり取りができるようになったり、状況を理解できるようになったりするなど、②「他の人や状況の期待と行動」ができること、そして、人と動作を合わせたり、行動を一緒にしたり、自分の役割に応じた行動をしたりといった③「周りの人に合わせた行動」に再構築し直しました。なお、内容の③の挨拶、強化、禁止、依頼等の言葉の理解、対応、表現については、この内容が、授業で単独で取り上げられることは少なく、他の指導内容と一緒に指導されることが多いため、あえて指導内容では、表面に出ない形に再構築してあります。

再構築した項目にそって、今回の研究・開発で、検討した授業の学習内容例を整理したものを第3章に表として示します。

内 容		指導内容例
対人関係に関する事	(ア) 人への対応の仕方の理解と具体的な行動	① 身近な人の存在の意識と人を介した行動 ・ 他人の存在を理解する。 ・ 人とやり取りして行動する。
	(イ) 状況への対応の仕方の理解と具体的な行動	② 人の名前、顔、表情等の弁別 ・ 他人からの期待に応じた行動 ・ 場面に応じた行動
		③ 挨拶、強化、禁止、依頼等の言葉の理解、対応、表現
		④ 人からの期待の理解
		⑤ 周りの人に合わせた行動 ・ 人と行動を共有できる。 ・ 役割の理解と行動

イ 「ソーシャルスキルに関する事」の指導内容

ソーシャルスキルに関する事についても、同様に再構築を行いました。平成19年度のリーフレットで整理した内容は、大項目として、(ア)役割のある行動の理解と具体的な行動、(イ)社会的マナーの理解と具体的な行動、(ウ)ルールの理解と具体的な行動です。そして、その内容は、①状況に応じ適切な行動、②因果関係の理解、③順番やルールの理解と行動、④役割への評価の理解、⑤地域や職場など学校以外の場面でのその場にあった行動、⑥状況に合わせた自分の行動の管理・調整（セルフマネジメント）になります。この内容を次の表のように、実際の授業で取組まれる学習内容例として、整理しやすいように再構築をいたしました。ソーシャルスキルに関する事についても、今回の研究・開発で、検討した授業の学習内容について、第3章の表に整理しました。

内 容		学習内容例
ソーシャルスキルに関すること	(ア) 役割のある行動の理解と具体的な行動	<ul style="list-style-type: none"> ① 状況に応じた適切な行動 ② 因果関係の理解 ③ 順番やルールの理解と行動 ④ 役割への評価の理解
	(イ) 社会的マナーの理解と具体的な行動	<ul style="list-style-type: none"> ⑤ 地域や職場など学校以外の場面でのその場にあった行動 ⑥ 状況に合わせた自分の行動の管理・調整(セルフマネジメント)
	(ウ) ルールの理解と具体的な行動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 役割活動 ・ ご用学習 ・ 順番の理解
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 移動・交通ルール ・ 公共施設・交通機関の利用 ・ マナー ・ 買物 ・ 挨拶 ・ 身近な道具・用具の使用
		<ul style="list-style-type: none"> ・ スケジュール ・ 活動の切り替え ・ 賞賛の理解 ・ 因果関係の理解 ・ 休憩の取り方

ウ 対人関係に関することとソーシャルスキルに関することの指導内容のバランス

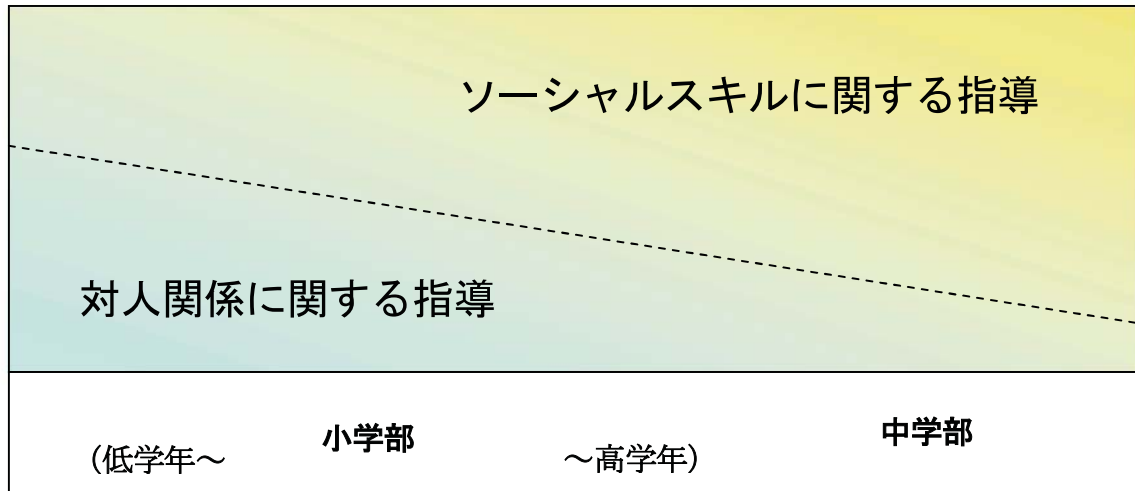
自閉症の児童は、他者との共感性を学習することが困難なことから、対人関係に関することについては、丁寧に時間をかけて、生活年齢や生活集団、状況に応じて、対応する方法を指導していく必要があります。

また、「社会性の学習」のねらいは、現在や将来の生活上・学習上の困難と軽減ですから、学校生活全般における児童の現在の学習課題や生活から、その段階で取りあげるべき「社会性の学習」のねらいも設定されることが望ましいと言えます。

そこで、初めて学校生活を始める小学校の低学年においては、まず、人とのやり取りや、教師とのやり取りを学び、学習をする態度・姿勢や賞賛や評価を受けることを学ぶこと、そして、学校集団に参加し集団活動の基礎を学ぶことといった学習の基礎の習得に重きが置かれる段階です。

このような段階である小学部低学年の自閉症のある児童にとっては、自閉症の障害からくる対人関係の困難さを少しでも軽減し、支援を受けながら、様々な学習の機会に対応できるようにしていくことが大切です。そこで、次の図のようなバランスで、重点の置き方としては、小学部の低学年では、まず、対人関係に関することに重きが置かれ、徐々に「ソーシャルスキルに関すること」を指導内容として、取り上げられるという指導内容のバランスを考慮することが必要であると言えます。

図 指導内容のバランス



図のように、小学部低学年の段階では、自閉症の児童が学校生活で始めて直面する課題に対する取組としては、音楽に合わせて教師と体を動かすことや合図に合わせて活動を開始すること、また、教師の評価を期待しながら活動を行うことや教師の指差しに応じて注意を集めることなどの、対人関係に関することに重点を置いて学習が挙げられます。

これらのことは、いわゆる学習態勢の構築にもつながります。まず、教師や大人の指示を受け入れ、褒められたり、評価されたりすることを期待して、行動することや学習することは、あらゆる学習の基本とも言えます。そのような学習態勢の構築の上に、生活の中の一般的な刺激、指示や暗黙のルールで行動するソーシャルスキルに関することが一層学習しやすくなると考えられます。

しかし、高学年になるに伴って、対人関係に関する指導は、必要なくなるわけではありません。繰り返しになりますが、「社会性の学習」のねらいは、自閉症の児童が、現在の学校生活や家庭生活もしくは将来の地域生活において、出会うであろう、つまづきやすいこと、困ることなどの困難な状況を想定して、その状況が改善されるような、知識や技術を学習することです。社会から要求される対人関係に関する行動は、生活年齢や所属している集団等の状況によって変わります。

例えば、挨拶は、小学校1年生と中学校1年生それぞれに大切で必要なことですが、挨拶の仕方は生活年齢に応じて、また、集団等の状況に応じて変わることが考えられます。このため、上図のような指導内容のバランスが考えられますが、課題はなくなるのではなく、年齢や発達段階に応じて、対人関係に関することもソーシャルスキルに関することも、それぞれの課題が想定されます。

また、学習が進むに従って、一人一人の自閉症の児童の社会性の障害やコミュニケーション、認知の障害の程度に大きな幅が生じてきます。この大きな幅は、社会生活や学習生活で直面する困難の大きな差にもなります。このため、大まかにいった指導のバランスは本頁の図のように考えられますが、「社会性の学習」において、取り上げる課題は、一人一人の児童ごとに違いがあります。